

【議事】定 43

(2) X線天文衛星「すざく」の観測の現状と成果

JAXA の井上理事が口火を切り満田教授が資料 43-2(すざくの成果)を説明した後、活発な質疑応答があった。

JAXA 井上: 昨年7月に打上げた「すざく」の観測を約一年行い、30件の論文が発表でき、9月に京都で開催したシンポジウムでは国内外の研究者200名が参集した。これを契機に「すざく」の成果を報告したい。

青江: 報告書の数をはっきりとは確認できていないと報告していたが、どういうことなのか。

JAXA 満田: サイエンスワーキンググループの活動は把握しているが、国際公募にタッチしていないので、その文の論文数を把握できていない。

青江: 国際公募の研究発表では「すざく」のデータと書かれるのか。

JAXA 満田: 出所を明確に示すことが暗黙の約束になっている。

青江: 論文を出したら送ってくるというような仕組みにはなっていないのか。

JAXA 満田: そのような仕組みにはなっていない。また、今後、観測データが公開されるが、それを用いた研究が行われるようになるが、更に把握が難しくなる。

青江: 税金を使って作った「すざく」の効果が把握できない<sup>1</sup>ということか。

JAXA 満田: 論文の検索機能が優れており、把握はできる。

<sup>1</sup> 確かに「仰る通り」なのではあるが、迫り方が激しく、成果の要求が性急に過ぎるとの印象を持った。

井口: データを占有して使う期間について、国際的に決まっているのか。

JAXA 満田: 明確な取り決めは無いが、1年が共通認識である。

JAXA 井上: NASAは試験観測を行わず、いきなり運用を開始する。その文日本が占有期間を終了する時期が遅れる。

JAXA 満田: 較正が不十分で、誤ったデータを渡すことを防ぐ目的で、十分に試験観測するという理由も有る。

井口: 日本は長いと聞いたことがある。

JAXA 井上: それはむしろ逆に見るべきで、アメリカでは占有終了が早いために、汗を流そうという人が減ってきている。開発に汗を流した人たちが、一定の期間優遇されることは必要なこと<sup>2</sup>である。

野本: サイエンスワーキンググループは何人居るのか。

JAXA 満田: 143人居り、そのうち日本人が100人である。また大学の学生もグループの中で手助けしており、それを入れると報告にある200人になる。

野本: 「情報の占有」とは日本人だけでということではない。

JAXA 満田: その通りである。

井口: 15ページに「あすか」と「すざく」の撮像が並べてあるが、メッシュは同じなのか。

JAXA 満田: 同じである。向こうが変わっている。

井口: この「すざく」は大変分解能が良いということであるが、地球表

<sup>2</sup> 「工学」の世界は特許という決まりがある。「科学」の世界はそれよりも緩く、広く世界で共有するという考えに基づいている。情報占有期間が各国約1年で共通しているのであれば、それで結構なのではないか。

面を見たら、どの位の分解能に相当する<sup>3</sup>のか。

JAXA 井上:「すざく」は余り良くない。チャンドラは良くて、1 ㌠を切るくらいと記憶している。

青江:科学の先端技術を地球観測などの実用に供する可能性を確認したい。

JAXA 井上:X 線は兎も角、赤外は地球に向ければそのまま使える。

青江:(科学観測と実用衛星の交流について重ねて質問。表現が曖昧で、言葉を追いきれなかった。)

JAXA 井上:工学的な部分に留まらず、センサ、冷凍機、その他でコラボレーションが行われている。

井口:地上をセンチメートルレベルで見られる<sup>4</sup>ようになれば、世の中が変わってくると思うが。

JAXA 井上:自分もそのように思う。(もう少し何か言っていたが、メモ

できなかった。)

野本:チャンドラとニュートンは今どんな状況か。

JAXA 満田:観測装置に問題が発生しているが、観測を続けている。

---

<sup>3</sup> 何かを達成すると、すぐその後の要求を口にされる。井口、青江のお二人は、育ってきた環境の相違からか、時間軸が違っているようである。自動車では、新車発表が他社から半年遅れることは大変不利なことであるし、家電では1ヶ月の遅れが致命的になったりする。宇宙はそれとは違っていいのではないか。

また、地表を X 線で観測したいのか、可視光の観測にこの技術を適用させたいのか、傍聴しているだけでは区別が付かない。どちらの質問であったのか?

<sup>4</sup> これは大変なことであるが、できないことではない。それより、高分解能データの配布に関する法規制を作ることが重要である。宇宙開発委員会は、技術動向に注視するばかりでなく、法規制の動向にも同じ注意力を向けて欲しい。空間分解能が 1 ㌠をきるより前に、法律が制定されていなければならない。